

「藤原宮跡資料室」の休日開館について

都城発掘調査部〔飛鳥・藤原地区〕では、奈良文化財研究所による藤原宮跡の発掘調査や研究成果の紹介を目的に、藤原宮跡資料室を1988年に設置し、以来、平日に限りその公開を続けてきました。しかし、かねてから藤原宮跡を訪れる観光客や一般市民の方々からの休日開館のご要望は強く、今回その声にお応えするため、橿原市地域振興局観光課等との協力体制のもと、2012年4月1日から、藤原宮跡資料室の年末年始を除く土・日曜日そして祝日の開館をおこなっています。

奈文研と橿原市は、この休日開館の実現のため、様々な準備をしてきました。開館以来四半世紀がたち痛んだ内装を新しいものに替え、あわせて展示品や開設パネルの一部もリニューアルし、さらに外国からの入館者への利便をはかるため、これまで日本語版しかなかった「特別史跡藤原宮跡」パンフレットについては英語、韓国語、中国語版を新たに用意しました。また、土・日曜日、祝日限定ですが、資料室へのアクセスを容易にし、かつ奈文研の飛鳥資料館、橿原市の藤原京資料室等周囲の文化施設を結ぶ周遊ルートを確認するために、近鉄八木駅を起点とするコミュニティバスが資料室前にも停車することになりました。

休日開館が始まって早2ヶ月、その開始にあわせて奈文研創立60周年記念展示「埋もれた大宮びとの横顔－藤原宮東面北門周辺の木簡」を実施したこともあり、約1,400名というこれまでにない数の入館者を迎えることができました。奈文研では、藤原宮跡資料室が観光客や一般市民の方々からこれまで以上に親しまれるよう、これからも様々な取り組みをおこなっていく予定です。

(都城発掘調査部 渡辺 丈彦)



リニューアルされた藤原宮跡資料室

パネル展「京都岡崎の文化的景観」

文化遺産部景観研究室では、京都市文化財保護課と共同で、2010年度から東山山麓の琵琶湖疏水が流れる岡崎地域を対象に、国の重要文化的景観選定に向けた調査を実施しています。その調査成果の報告展として、パネル展「京都岡崎の文化的景観」を2012年3月13日から22日の期間、細見美術館(京都市左京区岡崎最勝寺町)で開催しました。

現在の岡崎は、美術館や図書館が集まる文教地区としてのイメージが強いですが、時代をさかのぼると、明治23年(1890)の琵琶湖疏水開削を機に、舟運、水車、水力発電による工業地開発、博覧会開催と跡地整備による岡崎公園の誕生、疏水庭園群からなる別荘地開発等、京都の近代化を象徴する土地でした。さらには、江戸時代には聖護院蕪等の京野菜の一大産地、平安時代末期には六勝寺や院御所等の院政政治の中心地でもありました。ダイナミックに都市の姿を変え続けてきた岡崎ですが、時代を超えて岡崎の地を一つのまとまった形で捉えたとしたら、どのような見方がありうるのでしょうか。

本パネル展では、「文化的景観」として岡崎の地を読み直すことを試みました。これは、現在の景観を目に見える眺めだけでなく、脈々と連なる歴史の中で、人々の暮らしと風土の間に生まれた景観を形作る仕組みから捉え直す試みです。展示内容は、「自然」、「歴史」、「生活・生業」の3つの視点から、文化的景観としての岡崎の読み解き方や、「疏水庭園と生態系」、「夷川ダムと水車利用」等をテーマにしたもので、写真、映像、イラスト図面等を交えて解説しました。

この展示を通して、岡崎の文化的景観の保護と、岡崎地域の将来像について考えるきっかけとなれば幸いです。

(文化遺産部 松本 将一郎)



展示会場の様子(会場からは東山と岡崎公園が望まれる)